（平成１４年度　教育カウンセラー養成講座　青森会場）

「教育カウンセリング概論」

カウンセリング・サイコロジスト
國分　康孝　Ph.D

Ⅰ　心理療法とカウンセリングの識別

1　ロジャースの功罪

…非指示的態度、「受容」と「共感」の普及とその挫折

→禁止・命令・指示なしの手放しの「受容」「共感」は教育を破壊する。

2　日本の「スクールカウンセラー」の功罪

…臨床心理学は「治す」力。臨床心理士は心理療法の専門家であり、カウンセリングの専門家ではない。

→教育には「育てる」力が必要である。

3　病理的問題と発達課題の識別

…前者は臨床心理学の対象であり、後者は教育の対象である。

→教育とは社会化である。社会化とは文化を伝えることである。教育には「社会化するためのカウンセリング」が必要なのである。

Ⅱ　教育の三大課題

1　academic development（学業）
2　career development（進路）
3　personal/social development（人格形成）

※これからの教育を行う者として一番望ましいのは、「カウンセリングを知る教育者」であり、その次が「教育を知るカウンセラー」である。

Ⅲ　教育に役立つカウンセリング

（心理療法）		（　教　育　）
1　1対1	→	グループアプローチ
2　受動的	→	能動的
3　快楽原則	→	現実原則…「つらいことでも耐えてやる」

※「受容」「共感」で有名なロジャースの論文は、実は能動的な内容である。日本で広まるときに受動的と誤解されてしまった。

※教師は治療者ではない。ここぞというとき、能動的にならなければならない。

※心理の説明だけでは実践家（教師）の役に立たない。以前、國分の紹介である企業を受けることになった学生が、面接を無断で休んだため、國分が謝罪に行き、社長に学生の気持ちを代弁して説明したら、社長に言われた。「先生、心理状態を説明しても、世の中通りませんよ。」

Ⅳ　教育カウンセリングの基本技法-リレーション-

→教育に不可欠なものは「リレーション（ふれあい）」

・「馬は伯楽に会ひていななき、人は知己に会ひて死す。」＝人間は、本当に自分を理解してくれる人物に出会うことができれば、死んでも惜しくないと思うものである。

・夏目漱石が言ったように、「師が弟子を他人のように見、弟子が師を敵のように見る」ような状態では、教育にならない。

・学級崩壊とは、諸富によると「子どもによる教師いじめ」である。

・國分の教え子の研究によると、生徒が学校をドロップアウトする理由で一番多いのが、「誰も友人がいなかった」で、その次が「誰も好きな教師がいなかった」である。

・「落ち込み」は、ヒューマン・ネットワークがあれば起こらない。

・ある研究によると、３０代のときに「いい上司」に仕えた人は、重役になりやすい。「いい上司」は自己開示的であり、リレーションの作り方が上手である点が良い影響を与えると考えられる。

（リレーションを作るための３つの方法）

１　ワンネス　oneness

…カウンセラーがクライエントの内的世界の中に入っていき、自他一体となった世界を持とうとする関係

①特定の価値観に固執しない

→相手の身になりきれること

（例）ある時、良寛は知人から頼まれて、自分の家に不良少年を１週間預かった。良寛は特に何も説教はしなかったが、１週間の後、不良少年が明らかに良くなった。

②幅広い感情体験を持つ

→苦労は教師の世界で非常に役に立つ

・エーリッヒ・フロムの本が参考になる。一冊でも読んで欲しい。

・「リフレーミング」（同じ事象でも、見方を変えると違って見える）や「シェアリング」（他人の受け取った内容を聞き知ることにより、自分の考え方を知る）などが有効である。

２　ウィネス　weness

…カウンセラーがクライエントの味方になり、相手のためになることを行おうとする関係

①相手の物理的存在に気づく

→「愛でる」ということ＝「見てあげる」ということ

（例）しばらく引きこもっていた教師の家に、新しく来た校長が頻繁に訪れ、ある時運動会に誘った。その教師がおそるおそる行ってみると、校長が「よく来たね。君の弁当はこれだから」と弁当を指さした。１年後、現場復帰したその教師は、あのときの校長の言葉で、自分の居場所がここにあるのだと知って嬉しかったという。

②相手の長所を認める

人をほめられない教師は劣等感が強い。

教師は自分の劣等感をどこかで処理（始末）しておくことが必要である。

人をほめられるようになるには、

・ほめ上手の教員を真似すること

・複数の価値観を持つこと＝特に異文化にある人との交流

が一番良い。

③相手の役に立つことを具体的に行う

教師は生徒を体を張って守る。学校でも、会社でも、上司は部下を体を張って守らなければ信頼されない。

3　アイネス　Iness

…カウンセラーとクライエントがそれぞれ、異なる内的世界を持った個人として、ともに存在しているという関係

①自己開示

→昔はカウンセラーの自己開示は禁止されていた。しかし、実存主義によってその禁止は打ち破られ、今では流派を問わず、大体開示している。

カウンセリングは「Person to Person」であり、「治す者と治される者」ではない。國分がアメリカの大学にいたとき、落ち込んでいた教授の話を聞いてあげ、カウンセリングした学生もいた。自己開示すれば、それがヒントになり、生徒や保護者の役にも立つ。

自己開示は教育における耳学問の元となる。1970 年に「数学のノーベル賞」とよばれるフィールズ賞を受賞した広中平祐は、「自分の知識は全部人から聞いたもの。自分はただそれをまとめただけ。」と公言していた。

自己開示は、リレーションづくりに大事な役割を持つ。自己を開示できる教師は自己受容できている教員である。

（例）ノイローゼで一年入院した教員が、復帰後、なぜ一年間いなかったかを子どもたちに問われて語ったこと。「今まで、精神科に行く人は気の違った人だと思っていた。でも、自分がそこに行ったら、とても心の清い人ばかりだった。」

②自己主張

教師は「超自我」であることが要求される。しかし、言うべき時は、きっちり言うこと　。

「千万人といへども我往かん」という気概、人生哲学を持つことが必要である。

カウンセリングは、パーソナリティ丸出しでやることであり、全人格で相手に接することである。

（例）ある非行少年がカウンセラーに語ったこと。「自分がいくら悪いことをしても殴れない父親を軽蔑していた。」→叱るべき時に本気で叱ってくれない父親への失望が非行を助長する。

（例）ある殺人犯は、判決で死刑にならなかった。「相手の命はもう戻らないが、自分は生き残ってしまった。」という思いから、不眠が続き、自傷行為を繰り返した。カウンセリングした國分が、なぜ自分だけ生き残ってしまったのかという殺人犯に対し、「それは、二人分生きてから死ね、ということだ。」と言うと、不眠・自傷行為がなくなっていった。

※oneness のできる人が weness に進め、weness のできる人が Iness に進める

Ⅴ　教育カウンセリングの領域

1．構成的グループエンカウンター

現今の子どもの問題はリレーション体験の欠如に帰すことができると思われる。それゆえ、リレーションの回復の有効な方法として構成的グループエンカウンターを提唱したい。高級井戸端会議である。研究も実績も盛んである。

2．キャリア・ガイダンス

進路指導は職や学校の紹介事業ではない。これからどういう人生を歩みたいかを考えさせる教育のこ

とである。それゆえ人生計画学である。人間教育のひとつである。なぜならば自分の興味・適性を吟味するとか、アイデンティティを模索するとか、外界の動きや人生の事実も知らねばならない。これを援助促進するのは教師の主要な仕事である。

3．グループ体験に生かすカウンセリング

特別活動の本質は集団体験にある。集団体験が人を癒し人を育てる機能がある。構成的グループエンカウンターの発想と技法を活用することをすすめたい。（國分康孝編著『子どもの心を育てるカウンセリング』学事出版）参照。

（集団の持つ機能）

①集団の規範

（例）広中学長が山口大学に赴任した時の挨拶「私はこの大学を日本一にするために来た。みんなも日本一になって欲しい。」→学校の雰囲気が一変した。

（例）アメリカの大学に４年いると、宗教心が衰えるという調査結果がある。理由として考えられるのは、常に事実に基づくことを言わなければ相手にされないから。

②役割（権限・責任）

（例）國分がアメリカの学生であったとき、掃除のアルバイトをしたことがある。例えば床の担当になったときは、全部終わったといってもそこで仕事をやめると厳しく注意された。他の学生は勤務時間内に仕事が終わってもなにかしらやることを見つけて仕事をしていた。

③モデリング

人を変える。集団でプロジェクトを完了するまでの過程で気づき、学ぶ。

4．対話のある授業

聞き手の身になって語るのが対話のある授業である。さらに、教師の発問の仕方、子どもの応答に対する言葉の返し方の中にもカウンセリングの対話の精神が生きてくる。さらにまた子ども同士が授業の中でシェアリング（意見や感情の交換）をするのもカウンセリングを生かした授業である。ニーズの高い子どもの学習指導も本領域に含まれる。（國分康孝監修『育てるカウンセリング全書』第４巻　図書文化社　1998　参照）

5．チーム支援

これからのスクールカウンセリングは学校の一隅でカウンセラーが個人開業している形のものであってはならない。教師、保護者、養護教諭、管理職、地域の書記官が連携して子どもへの援助を計画すべき時代である。つまりカウンセリングの方法の中の『コンサルテーション』が育てるカウンセリングには有用ということになる。

6．サイコエジュケーション

思考・行動・感情の教育は教師のテリトリーであり、心理の専門家の仕事ではない。ソーシャルスキル訓練、自己主張訓練、人権教育などがその例である。

これからの教育の３本柱は、①構成的グループエンカウンター、②キャリア・ガイダンス、③サイコエジュケーションである。

7．個別的援助

伝統的カウンセリングを教育指導に応用した簡便法を開発する必要がある。家庭訪問、保護者との打ち合わせ、子どもとの個別面談など。

簡便法の代表としては、ブリーフ・カウンセリング（セラピー）があげられる。その他、勉強しておくべきものとして、

①精神分析
②論理療法（参考：國分康孝『自己発見の心理学』『ポジティブ教師の自己管理術』）
③行動療法
が挙げられる。

Ⅵ　教育カウンセラーの資質

教育カウンセリングでは、能動的にグループに関わっていく能力が必要である。傾聴能力の他にコミュニケーションが必要である。教育カウンセラーはサイコセラピストとは違うプロフェッショナルである。

１．コミュニケーション・スキル

アメリカでは教職課程の中に必ず入っている。日本の教師はもっときちんと身につけるべきスキルである。

２．リーダーシップ

①集団をまとめる②集団を動かす③個人を理解する、これらの力をまとめてリーダーシップと言う。

（参考文献）

１．A.S.ニイル　『問題の教師』（黎明書房）
２．A.S.ニイル　『問題の子ども』（黎明書房）
３．國分康孝　『カウンセリングの理論』（誠信書房）
４．國分康孝　『カウンセリングの原理』（誠信書房）
５．國分康孝『学校カウンセリングの基本問題』（誠信書房）
６．國分康孝『ポジティブ教師の自己管理術』（図書文化）
７．國分康孝・加藤諦三『ふれあうことでやさしくなれる』（図書文化）
８．國分康孝『学級担任のための育てるカウンセリング全書』（図書文化）
９．國分康孝『エンカウンターで学級が変わるシリーズ』（図書文化）
10．國分康孝『教師の生き方・考え方』（金子書房）
11．國分康孝『教師の使えるカウンセリング』（金子書房）
12．國分康孝『カウンセリング心理学入門』（ＰＨＰ新書）
13．國分康孝『心を伝える技術』（ＰＨＰ新書）
14．國分康孝『範は陸幼にあり』（講談社）
15．國分康孝『自己発見の心理学』（講談社現代新書）
16．國分康孝『リーダーシップの心理学』（講談社現代新書）
17．國分康孝『子どもの心を育てるカウンセリング』（学事出版）
18．國分康孝『スクールカウンセリング辞典』（東京書籍）
19．國分康孝・中野良顯『これならできる教師の育てるカウンセリング』
20．國分康孝・大友秀人『授業に生かすカウンセリング』（誠信書房）
21．國分康孝監修・押切久遠『非行予防エクササイズ』（図書文化）